未明

紫の匂いが滅した夜
男は家を出る
ポケットに角のとれた石を詰めて

岸辺の草をわけいって座ると
呼吸が整うのをしばらくまち
ポケットの中の石を一つ
湖面になげ入れる

挨拶のような抵抗があたりにひびき
水紋のひろがりが男に時を告げる

石は小刻みにふるえながら
沈みこんでゆく
下へ　下へ
言葉をかきわけてゆくように
湖の対岸にさざ波をおこす

石の生んだゆらぎが
男の鼻先をかすかにふるわせ

かの地の楓は種子を大地へはなつ
うまれたばかりの子供は
おどろき　泣いた

しかし
石は夜を支配しようと思わなかった
ただ　軌跡を楽しんだ

男は　ふたたび
石を湖面になげ入れる

石のかたちがひとつひとつ異なるので

沈みかたはみな違う
それらの違いがはたらきかける
変化を感じていた

やがて　風の色
木々の呼吸が変わったので
男は家に帰っていった

女は
男が出かけていたことも知らず
昨夜の眠りの先にとどまっている

男が眠りについたころ
石のゆらぎがとどき
女を　少しずつ
目覚めへと揺りうごかしてゆく